
緋弾のARIA ―Sword of six―

Mauros

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア I S w o r d o f s i x I

【Nコード】

N 2 9 9 2 B A

【作者名】

M a u r o s

【あらすじ】

イラク戦争へ身を投じていた宮本^{れい}隼武偵。任務を終えて日本に戻るが、武偵高でどこか自分と似た遠山キンジと双剣^{カドラ}双銃のアリアと出会う。

そのせいで隼は様々事件に巻き込まれ・・・！？

自分が守るものとは？

世界観の違いが関係に亀裂を生む！？

そして双剣双銃と二刀流の6振りが生む結末は！？

Episode (前書き)

自分Maurosの第2作目です。

この先、空(緋弾のアリア 【 零 】)との接点はないつもりです。

同時進行ですがめっちゃ頑張りますーφ(・・・；

Episode

「――敵部隊増援くるぞ!!!!」

「了解！」

ガチャッ、ダダダダダ!!

ダンッ、ダンッ、ダンッ!!

人は何故戦う？

「3 斑は右翼の障害物からまわりこんで、できるだけ接近して叩け
!!」

「了解！」

ターーーンッ!!!

「グッ!?!..うおっ...!!」

「中尉殿!」

「かまうなあ!!いけっっ!!」

「しかし...!」

「いけええっっ!!!!命令だッ!!」

「...!!..了解...!」

傷がつくだけだろう?

身体にも、大地にも、国にも、心にも。

「くそっ・・・！」

ひゅんっ！ぎしゅっ！！

駆ける、駆ける。
逃げるように。

向かう先には敵、敵、敵。

駆ける、駆ける。
戦うために。

ガチャッ、ダダダッ！ダダタッ！ダダダッ！

「死ねえっ！！」

最期の言葉は誰に聞かれることもなく消えていく。
家族にも、愛人にも。

「横田！無茶だ！！」

「いける！強行突破しかな・・・」

ダダダダダダッ！！

「ゴグあっ！！ガハアッ！！」
ドサッ

「横田あッッ！！」

戦場^こで初めて会って、銃を向けあい、弾丸を身体めがけて放ち合う。
そのたびに誰かが消えていく。

ダダダダダダダダダダダダダダダダ！！！！

――ヒュルルル…

「！！！」

「RPG！！！！伏せろ！！！」

――間に合わない。

「――俺が落とす！！！」

タタタッダンッ！！

跳ぶ。

刀を振り下ろす――

キンッ！

がしゃがしゃ！

「G」宮本！！ナイスカッティング！！」

「無駄口叩くな。佐久間。それに体制もつと低くしろ。狙撃班に殺スナイパーられたいのか。」

「へーへー。お前に言われたくないがな」

ダンダンダンッ！！

ドンッ！ドンッ！！ドンッ！！

ダダダッ！ダダダッ！……

『…………ガガッ……ガッ……宮本、G地区制圧完了だ。』

「……よし。」

駆ける、駆ける。
戦うために。

「G地区制圧完了……!!」

らしいな。

守るために。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ーイラク最前線基地ー

「おう宮本お！早くしろお！遅いぞお！国に帰るぞお！……！」

「……朝からうるせーな佐久間。」

俺は宮本 隷^{れい}。

イラク最前線特攻精鋭部隊第3班所属。
階級は……ない。

何故なら俺らは傭兵。

日本からはるばるやってきた武偵だ。

イラクに来て11ヶ月になる。

元は東の後方部隊に所属していたがある事件があり、その時に最前線へ狩り出された。

「帰るつつつても戦場が変わるだけだ。殺れないだけでそんな変わ

「んねーよ。」

日本からでてしまえば日本の法律など関係ない。
だいたい戦場で「殺さないで戦え」なんて言われたら自殺もんだが
な。

「はあ！？故郷に帰れて嬉しくないのか！？」

「別に。」

「別に……って……くぅ！お前なあ！？」

こいつは佐久間鉄也。

うるさいしバカだし空気読めないし……。

しかし戦闘においては頭一つ、いや頭四つも五つも抜けていやがる。

「お前帰ったら何があると思ってんだ！？」

「……まさかお前武偵高での学園ライフとか言うんじゃない
だろうな？」

「ギク」

「バカだ。お前は」

ちなみにもう一つ。俺らは16歳。
日本では高校2年生だ。

「なんでだよー！だって入学してすぐこっち来たから何もしてねーじゃん！高校生活には憧れてたんだぜ俺は！！」

「あーそーかいそーかい。ほら、行くぞ。準備終わったよ。」

「へーへー」

俺らは特に何も入っていない軽いバッグと、それより重い銃器と日本刀を担いで空港へ向かった。

「……もうここにはこれないんだな。」

「……佐久間。」

「ああ。」

俺らは基地を出て戦場の方向に向かい、胸に手を当てた。

じゃあな、戦友たち。
成仏しろよ。

ふいに風が吹き、髪を揺らす。

――ああ、じゃあな。

声が聞こえた気がした。

俺らは空港で飛行機に乗り、戦場を飛び立った。

戦友をこの地に残して。

.....

Ⅰ 第15期戦争特別加担兵Ⅰ

アメリカ

ロイ・アレックス

国軍兵

戦死

クラーク・カフ

国軍兵

戦死

グレー・ダニー

国軍兵

行

方不明

ドナルド・スミス

武偵

戦死

カナダ

ジム・キャンベル

国軍兵

行方不明

ジョン・ギルバート

武偵

戦死

日本

宮本 隼

横田 晴也

佐久間 鉄也

葛西 琢磨

生存

戦死

生存

行方不明

武偵

武偵

武偵

自衛隊員

Episode (後書き)

ああ忙しい。(好きでやってるんだけどね。)

? ・ Sound of war (前書き)

本編です。

ぬいぬい (ー ・) m

高校生にしては超高額だ。

「お前は家立てる為に戦争行ったのか？・・・だいたい500万じやろくな家建てらんないだろ。俺はそんな事につかねえよ」

「じゃあ何に使った？」

「・・・これから考える。」

「お前こそ何しに行ったんだ！！」

そんなやり取りの間でも手は止まらず、5分弱でハンバーグ定食を平らげた。

俺も少し遅れてこいつと同じハンバーグ定食を食べ終わり、レストランをでた。

見上げれば所狭しと立ち並ぶビル群。

――約1年間のイラクへの遠征任務がかなり長く感じられる。

街並みはそれ程変わった様子はないが、自分の中ではかなり変わった気がするのには戦争に行つて自分の心境が変わっただけだろう。

「・・・戦争・・・か。」

「ん？何か言ったか？」

「何でもない。武偵高に行くぞ。」

「・・・横田か？」

「・・・」

横田晴也。俺らの同級生であり、仲間だった。

しかし、死んだ。俺の目の前で。

無理に強行突破を試みて失敗して文字通り八チの巢にされた。

無残な死だった。

「もうあそこでの事は忘れろ。過去を悔やんでも仕方ない。前に進むしかないんだよ。」

・・・こいつはただの馬鹿かと思えば、優しいことも言えるし、こ
うやって人を励ましてやれる。

「・・・ああ。スマン。ありがとう。」

「おうよ。」

照れてるのかそっぽを向いている。

ホントわからんやつだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ホテルをとってから、俺らは武偵高に任務の結果報告など仕事関連で行き、少し島を歩いてみた。

「ここで2年間過ごすんだな。」

「ああ。」

「・・・・・・・・」

沈黙。

俺は普段からあまり喋らないので佐久間が静かなだけである。

たぶん、ここが楽しい学園生活を送ろう！！なんてところじゃないことを思い出したのだろう。

そう、武偵。

日々凶悪化していく犯罪に対抗するために新設された、警察に準ずる活動ができる国家資格。
武偵高はその養成機関だ。

しかし、たかが高校生に拳銃持たせて凶悪犯と戦わせるとは、世も末だな。

だが別に否定はしない。

理由がないから。

「帰ろうぜ!!」

佐久間が伸びをしながら言う。

「ああ。」

夕陽に染まる学園島をあとに、ホテルに帰った。

.....

翌日。

俺らはそれぞれ一度実家に、荷物を取りに帰った。

俺の家族は父、母、自分の3人家族。

父は剣道の道場の師範をやっている。

母はそんな父と対象に通訳の仕事で世界を回っていてかなり多忙のようだ。

どうやってこの二人が結びついたのかは、全く謎である。

そんなことで家についても誰もいなかった。

鍵はいつも倉庫の上から二番目の段の籠の中に入っているからそれで家にはいる。

セキュリティなんてあったもんじゃない。

普通の和風ベースの一軒家。この家――いや、家族にはある事情がある。

そのこともあって武偵になったのだが。

イラクにいく前にダンボールに入れてまとめておいた制服などの荷物を抱え、さつさと家を出て寮へと向かった。

佐久間の実家は区内だからもう着いてるだろう。

寮の近くの駅で降り、改札を抜けると、前方からくるものにふと目が留まるものがあった。

それは、武偵高の制服を着ている女子。

しかし・・・

小学生？

かなり小さい。

緋色のツインテールを揺らしながらてこてこ歩く姿は小学生そこらにしか見えない。

しかし、顔立ちはかなり良く、日本人離れた外見はおそらくハーフであろう。

その時は、コスプレか？とだけ思って通り過ぎたのだが、のちにこの人物と関わりを持つなど考えてもいなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

暗闇。

何も見えず、音だけが聞こえてくる。

それは殺戮の音。

戦争の音。

「――敵部隊増援くるぞ――!!」

「了解！」

ガチャッ、ダダダダダ!!

ダンッ、ダンッ、ダンッ!!

人は何故戦う？

・・・またか・・・

「3班は右翼の障害物からまわりこんで、できるだけ接近して叩け

「!!」

「了解!」

ターーーンッ!!!

「グッ!?!..うおっ...!!」

「中尉殿!!」

「かまうなあ!!いけっっ!!」

「しかし...!」

「いけええっっ!!!!命令だッ!!」

やめろ...

ひゅんっ!ざしゅっ!!

ガチャッ、ダダダッ!ダダタッ!ダダダッ!

「死ねえっ!」

「横田！無茶だ！！」

「いける！強行突破しかな・・・」

ダダダダダダッ！！

「ゴゲあっ！！ガハアッ！！」
ドサッ

「横田あッッ！！」

ぐ・・・やめろ・・・！！

ダダダダダダダダダ！！！！

ダンダンダンッ！！

ぐわあああああああ！！！！

ドンッ！ドンッ！！ドンッ！！

ぐおっ！ぎゃあああああ！！

ダダダッ！ダダダッ！

ハハハハ！！死ねえ！！！！！！

駆ける、駆ける。

戦うために。

や、やめてくれ・・・！！

「「「「「宮本」」」」」

守るために。

やめろおおおおおおお！……！！！！！！

「……っ！！！！」

ガバッ！

「……はあ……はあ……くそ……」

——日本に帰って3日目の朝。

また同じ夢だ。

何度もみて、俺を苦しめた。

暗闇。

何も見えず、淡々と戦争の音が聞こえてくる。

銃器が火を吹く音。

生身の肉が刀に切り裂かれる音。

殺戮兵器が飛び交う音。

そして、

銃弾に倒れる戦友たちの悲鳴。

気が狂いそうになるのを抑えなければならない。

たかだか夢だ・・・そう言い聞かせる。

寝汗を拭いて時計を見ると、

！・・・7時45分・・・！！

昨日調べておいた近くのバス停は7時45分発だ。

「再登校早々遅刻はねえよな・・・！佐久間！！起き・・・！」

佐久間の姿はそこにはない。

とっくに行ったようだ。

あのやろっ・・・

鞆をひつつかんで朝飯は食べずに部屋を出てーおっと。忘れていた。

拳銃、日本刀を装備してまた部屋を出る。

ホテルから登校？しかも凶器ぶら下げて？という視線を感じるが
構いなしだ。

・・・交通機関は何もないのにどうする？

全力ダッシュ。

それしかないだろ。

・・・遅刻だろうがな。

――生涯。

生涯、俺はこの遅刻を悔やむだろう。

何故なら、神崎・H・アリアと遠山キンジに出会ってしまったのだから。

?・Sound of war(後書き)

戦争ってなんなんだろうね。

いろいろあるのはわかるけどさ。

おかしいよね。絶対。

ゲームは楽しいけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2992ba/>

緋弾のアリア -Sword of six-

2012年1月9日01時48分発行